



# Temptation 2

---

著：春風菜

画：唯々月たすく

原作：Parthenon



ぶちばら文庫



誘うような吐息が、  
境界線を踏み越えさせる。。

沙耶香のために……  
求めるままの治療が……  
もっと淫療が必要なんだ！

|       |                  |     |
|-------|------------------|-----|
| プロローグ | 治療開始 ～橘宮沙耶香～     | 5   |
| 第一章   | 催淫療法1 無防備美少女     | 13  |
| 第二章   | 催淫療法2 カウンセラーの欲望  | 44  |
| 第三章   | 催淫療法3 処女喪失・口内射精  | 71  |
| 第四章   | 催淫療法4 vibration  | 100 |
| 第五章   | 催淫療法5 escalation | 127 |
| 第六章   | 催淫療法6 淫乱覚醒       | 173 |
| 第七章   | 催淫療法7 性欲治療       | 210 |
| 第八章   | 催淫療法8 心の絆        | 228 |
| エピローグ | 治療終了 ～ふたりで歩む道～   | 256 |

「まだ沙耶香ちゃんは来ないのか……」  
始業の時間になって、もう二十分は経つというのに沙耶香は現れなかった。いつもなら始業五分以内には保健室に来ているはずだ。

(まさか本当に転校ということになったんじゃないだろうな……)

昨夜の悪夢を思い出して、誠は気が気でなかった。

それに、昨日は散々自分の能力を使って沙耶香を弄んだ。

「沙耶香ちゃん……まさか」

最悪の想像がよぎる。

誠が立ち上がった、そのときだった。

「あ、あの……遅れてすみません。おはようございます、センセイ」

遠慮がちに扉が開かれて、沙耶香が顔を出した。

「ああ、沙耶香ちゃん」

誠は、沙耶香を背後から抱きしめた。

もう会えなくなってしまうのかと思った。

胸に安堵とともに、愛しさがこみ上げてくる。

「センセイ？ どうしたんですか？」

「う、ううん。大丈夫だよ、沙耶香ちゃん」

抱きしめているうちに、気持ち落ち着いていた。

「あの……センセイにこうしてもらえると、嬉しいです」

沙耶香にそう言われて、先程までの不安が杞憂だったとわかって、嬉しくなる。

「今日も、カウンセリングお願いしますね」

「うん、うん……じゃあ、始めようか」

本当は普通にカウンセリングをするべきなのかもしれない。

今なら普通のカウンセラーに戻る事ができるかもしれない。

しかし、沙耶香の様子から心の状態に心配がないことがわかった、急に別の感情が湧き上がってきた。上がってしまった。

後ろから抱きしめたので、沙耶香のお尻の感触が股間に当たっていたことも原因の一つだろう。

「……それじゃあ、カウンセリングをはじめよう」

誠はそのまま後ろから、沙耶香のスカートに手を伸ばした。

「あつ……センセイ、なにを……？」

「……沙耶香ちゃんのココがどうなってるか、確かめさせてほしいんだ」

スカートをめくり、下着の上から秘部に掌を這わせる。

沙耶香は身をよじって逃れようとした。

「あぁっ!! そ、そこは……ダメですっ」  
もちろん、沙耶香は本気で嫌がっているわけではない。

やはり恥ずかしい、というのが一番の理由だろう。

「どうしてダメなの?」

誠は優しい口調で尋ねた。

「だ、だって……」

「沙耶香ちゃんのココ、凄く熱くなってるね……。ほら、下着の上からでもわかるくらいだよ」

「あっ、あつ……あ、あぁん、センセイ……」

「もしかして、もう濡れてるのかい?」

「ち、違う……」

否定の言葉を口にしたものの、沙耶香の抵抗はどんどん弱くなっていく。

「感じてるね? 胸だって……ほら、乳首が硬くなってきた」

「セ、センセイ……触っちゃダメえ……」

「気持ちよくなってしまうから? いいんだよ、沙耶香ちゃんはどんどん気持ちよくなっているんだ……」

「でも……でも、汚いです、そこは……。シャワーも浴びてない……」

どうやら沙耶香の意識は、胸よりも股間に集中しているらしい。

（こっちを責めるのは、もう少しリラックスさせてからのほうが、いいかもしれないな）

誠はまずは、胸を中心に責めてみることにした。

「あつ……んっ……あぁっ、あつ、あぁん……」

（沙耶香ちゃんは、敏感だな。いつも予想以上の反応が返ってくる……ふふ）  
まるで沙耶香の身体は全身が性感帯だった。

先端だけでなく、乳房の周辺を軽く撫でるだけで、沙耶香の口からは甘い声がひっきりなしに漏れる。

「あぁ……あつ、あつ、あつ……あふっ、ふぁっ……あぁんっ!」

誠は、息がかかるぐらい顔を近づけて沙耶香の耳元で囁いた。

「気持ち、いいかい?」

「んあつ……は、はい、凄く……凄くいいですっ。セ、センセイの指が……ち、乳首に触れるたびに……沙耶香、感じてしまいますっ。あつ、あつ、あぁっ……んあつ、あぁんっ、あぁっ……!」

「そんなに感じていたら、こっちは大変なことになってるね?」

誠は下着の中に指を滑り込ませ、沙耶香の秘部に直接触れた。

「あぁっ、ダ、ダメっ!!」

「もう遅いよ、直接触ってる」

誠は円を描くように指を動かした。

「んあつ、ああつ……あつ……せ、センセイの指がっ……ああつ、ああつ！」

「やっぱりだね、もうグシヨグシヨだ」

「ああつ、いやあ……せ、センセイ……ダ、ダメえ。お願いですつ、わたし……ああつ、ああつ、ああんっ！」

ダメと言いつつも、沙耶香は足をだらしく開いて、誠にされるがまま秘部を指で弄られていた。

「あつ、あつ、ああつ……あつ、ああんっ、ああつ……。いやつ……ああ……き、気持ちいいつ。あああつ、あつ、ああつ……んあつ、ああつ……。も、もう、ダメえ……立つていられなくなっちゃう」

「まだ、ダメだよ。キミのこと、もっともつと気持ちよくしてあげたいんだから。……ほら、ココはどう？」

「んあああつ!!」

指が敏感な肉芽を擦り上げると、沙耶香は一際大きな声を上げた。

「はあつ、はあつ、はあつ……はうつ、うつ、んああつ。あつ、あつ、ああつ……す、凄い……凄くイイツ」





沙耶香は激しく首を振りながら、うわ言のように喘ぎ声を上げ続けた。

「ほ、本当に……本当にもう……ヘンになっちゃうッ。セ、センセイっ……あつ、ああつ、センセイッ！」

「このまま、指でイカせてあげるからね」

絡みつく熱い粘液を感じながら、誠はさらに速く、さらに激しく指を出し入れさせた。いやらしい水音が部屋に響く。

「イッ……あつ、ああつ、んああつ……あうっ！ んああつ、ああああ~~~~んッ!!」

沙耶香は激しく首を振ると、全身をブルブルと痙攣させた。

同時に沙耶香の膣内から大量の愛液が溢れ出した。

「ふふ……沙耶香ちゃん、いっぱい気持ちいい液が出ちゃったね……」

「は、ああ……ご、ごめんさい……センセイ」

「謝ることなんてないよ。私が沙耶香ちゃんを気持ち良くしたくて、したんだから」

「……ありがとうございます……センセイ」

沙耶香は誠に体を預けながら、感謝の言葉を口にしていった。

それと同時に、一時間目の授業の終わりを告げるチャイムが鳴り響いた。

「沙耶香ちゃん。続きは、またお昼休みの後にしよう。いいね？」

「はい……センセイ。また、お願いします」

沙耶香は服を整えると、お辞儀をして保健室から出ていった。

軽く暗示を掛けているものの、もう半分は沙耶香の意志といってもいいだろう。

「ふふ……経過は順調だ」

朝の不安はもう完全に吹き飛んでいた。

\*\*\*

「ああ、センセイ……」

二時間目の休み時間。

普段ならカウンセリングはないが、沙耶香は自分から保健室にやってきていた。保健室に入ると、沙耶香は自分から誠にもたれかかってくる。

「沙耶香、ちゃん？」

「キスしてください、センセイ」

「ん……」

返事の代わりに、黙って唇を重ねる。

「あつ、あんっ……」

二度、三度と唇を合わせていると、沙耶香のほうからも進んでキスをしてくる。

ぶちばら文庫

# Temptation2

(テンプレーション2)

2010年 12月 4日 初版第1刷 発行

■著 者 春風栞  
■イラスト 唯々月たすく  
■原 作 Parthenon

発行人：久保田裕  
発行元：株式会社パラダイム  
〒166-0011  
東京都杉並区梅里2-40-19  
ワールドビル202  
TEL 03-5306-6921

印刷所：中央精版印刷株式会社

本書の内容を無断で複製・複写・放送・データ配信などを行うことは、  
かたくお断りいたします。

落丁・乱丁はお取り替えいたします。

定価はカバーに表示してあります。

©SHIORI HARUKAZE ©Parthenon

Printed in Japan 2010

PP007





# Temptation

～催眠の奈落～



ぶちばら文庫02  
春風葉 著  
唯々月たすく 画  
Parthenon 原作  
定価 650円(税込)

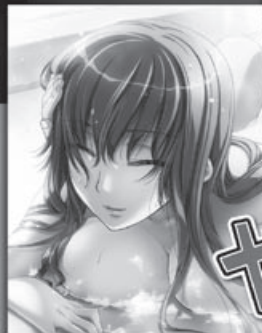
好評発売中



描き下ろしアフターを  
今回も収録予定!



ぶちばら文庫05  
沖田和彦 著  
すめらぎ琥珀 画  
あるてみず。原作  
定価 670円(税込)



姉のSINK! 2